



# 名大祭

—四〇年のあゆみ—

山口拓史



# 名大祭

— 四〇年のあゆみ —

山口 拓史

## 目次

はじめに……………	2
一 愉快な名大祭……………	3
二 名大祭の誕生……………	12
三 時代を映す名大祭①——一九六〇年代……………	19
四 時代を映す名大祭②——一九七〇年代……………	29
五 時代を映す名大祭③——一九八〇年代……………	33
六 時代を映す名大祭④——一九九〇年代……………	39
おわりに——名大祭の未来——……………	44

## はじめに

名古屋大学（以下、本学ともいう）では、毎年六月初旬に名大祭が開催されています。今年二〇〇二（平成一四）年度も、第四三回名大祭が東山キャンパスで六月五日から九日までの五日間にわたって開催されました。現在、国内には約六八〇校の国公私立大学（四年制）があります。それらのすべてを正確に調べたわけではありませんが、大半の大学が秋季（九月〜一月）に大学祭を開催しています。その点からみると、大学祭を初夏に開催する名古屋大学のよいうな事例は珍しいといえます。ただし、本学での大学祭が、最初から初夏に開催されていたわけでもありません。

そもそも本学において「大学祭」という名称が使われるようになったのは一九五七年以降のことです。それ以前は「開学記念祭」という名称で、講演・合唱・演劇・展示などの文化諸行事や体育行事が行なわれていました。しかも、当初、開学記念祭は一月初旬に開催されていましたが、一九五二年以降から五月下旬あるいは六月初旬に繰り上げて開催されるようになったのです。そして、今日のように「名大祭」という名称で開催されるようになったのは、一九

六〇年六月開催のとき以降のことでした。

なお、本学では、この開学記念祭とは別に学内の諸文化団体がそれぞれに開催する「文化祭」がありました。それらについては、一九五四年以降、秋の好シーズンにまとめて文化祭として行なわれるようになっていきます。

本書では、名大祭について取り上げたいと思います。その際、なぜ名大祭が一九六〇年という時期に誕生したのか、その後四〇余年の名大祭のあゆみはどのようなものであったのかなどについて触れてみたいと思います。過去の名大祭との比較を通じて、今日における大学祭の意味を歴史的に考察する際の手がかりを提示するのが本書のねらいとなっています。

## 一、愉快な名大祭

### ◆第四三回名大祭―「飛翔」

二〇〇二（平成一四）年六月五日から九日にかけての五日間、名古屋大学東山キャンパスに

において、第四三回名大祭が開催されました。名大祭本部実行委員会の集計によると、期間中の来場者数は四万人に達したとされています。この数字は、二〇〇一年度開催の第四二回名大祭の来場者数を一万人も上回るものだそうです。

第四三回名大祭のテーマは「飛翔」でした。これは、一三四件の一般応募作品のなかから最終的に学内一般投票によって選ばれたテーマです。このテーマには、次のようなメッセージが込められていました（『第四三回名大祭パンフレット』）。

「どこまでも青い大空を自由に飛びまわりたいと思ったことはありませんか？」

きつと大勢の人が夢見たことがあると思います。……（略）……そもそも私達は何故、空をとぶことにこうも憧れてきたのでしょうか？……（略）……私達の上に広がっているこの大空にも、いまだ私達の知らない無限の可能性が秘められているのではないのでしょうか？……（略）……名大祭も同様、私達にとって無限の可能性を持ったものだと考えられないでしょうか？つまり、名大祭では様々な企画が催されます。そしてその中にはきつと自分にとって良かったと思えるもの、おもしろいと思えるものもあるはずですよ。しかし、そのような企画を見つけたのはあくまで自分自身であり、逆にいえば自分次第で名大祭はいくらでもおもしろいものになるのです。……（略）……大空を自由に飛びまわるとい



第43回名大祭オープニング・セレモニー（名大祭本部実行委員会提供）

夢を、名大祭という大空で現実のものにしてみませんか？

無限の可能性を秘めた大空「名大祭」で、参加者それぞれが自分なりの「飛翔」を繰り広げる―これが第四三回名大祭の基本概念であったといえます。そして、実際の名大祭では、この基本概念のもとで、次のようなさまざまな企画が展開されたのです。

#### ◆さまざまな企画

名大祭パンフレットの目次をみると、開催期間中に行なわれるさまざまな企画が一〇のジャンルに分けられていることがわかります。「プレ企画」「ステージ・イベント」「飲食・販売」「学術系企画」「展示・展覧」「スポーツ」「芸

## 第43回名大祭「研究公開」一覧（開催日順）

〈6/5〉

貧困撲滅：21世紀の挑戦

〈6/7〉

環境を守り生活を支えるプラスチック／植物の形作りを探る／誰でもわかる糖鎖生物学／身近に存在する放射線／地球水循環研究センター研究室公開／電子顕微鏡H U-2をめぐって／循環型社会の実現を目指して

〈6/8〉

環境医学研究所研究室公開／光で見る宇宙と地球／塵から生命の惑星へ／東海地震・東南海地震／素粒子物理学を身近に体験しよう／環境を守り生活を支えるプラスチック／人間と森林の共生の道を探る／資源植物の構造と機能の関係を探る／生命現象を化学で探る／ビタミンCの新たな生理機能／糖尿病原因遺伝子の同定／「小さな」人工世界が造る「大きな」びっくり／リチウムイオン2次電池の仕組み／現代の錬金術—プラズマプロセス—無線通信システムに関する研究紹介／生命科学の新しい展開—生体分子の立体構造から機能の解明・推測へ／多元音響情報の総合的理解／量子エネルギー工学展／マイクロマシニング～シリコンで作る微小機器～／法学部生による無料法律相談／日本経済の課題／マインドコントロール防衛対策／磁石になる有機分子／土木展

〈6/9〉

太陽活動と地球環境／年代測定総合研究センター研究公開／謎の粒子ニュートリノ／生命と金属の関わり合い／分子生物学の最前線／生命を解く・測る／リチウムイオン2次電池の仕組み／量子エネルギー工学展／法学部生による無料法律相談／古書と江戸文学／古典古代の思想を考える

（『第43回名大祭パンフレット』より作成）

能・上映」「音楽」「趣味・占い」「学術」というジャンルです。名大祭本祭の期間（六月五〜九日）に先立って行なわれる「プレ企画」では、本祭に負けず劣らずの有名企画（「徹夜でスケート☆二〇〇二」フライデーナイトフィーバー!!」「仮装行列二〇〇二」など）が開催されました。

なお、「学術系企画」と「学術」の違いは、後者が名古屋大学にある研究所・研究センターや各大学院・学部の研究室が日頃の研究内容を紹介する「研究公開」などを中心とした企画であるのに対して、前者は有志団体があるテーマを設けて行なう研究会・研究会や講演会などの企画となっている



点にあります。

こうした一〇ジャンルの企画は、開催主体の違いに応じて、名大祭本部企画、名大祭一・二  
年生実行委員会企画、有志企画の三種類に分類することができます。

#### ◆名大祭本部実行委員会企画

第四三回名大祭では、本部実行委員会が行なった企画（本部企画）が一六企画ありました。  
本部実行委員会では、「多くの名大生が参加する名大祭」「参加者に親切な名大祭」という目  
標を掲げて、これらの企画を行なっています。

たとえば、プレ企画としての「フライデーナイトファイバー」や鶴舞キャンパスでの「医学  
部公開二〇〇二〜医次元への招待〜」の開催、また、オーブニング企画「Opening  
Ceremony ☆2002 ☆」をはじめ、豊田講堂前特設ステージを中心に行なわれる「Stage  
Rhythmix 02」「宴〜UTAGE〜」「26th THE GREEN FESTIVAL」「風夜祭」などのアトラ  
クション、講演企画などが本部実行委員会によるものでした。

このうち講演企画では、飯島澄男名城大学教授による最先端のナノテクノロジーに関する学  
術講演のほか、就職対策関連講演「イケてるっサラリーマン!!」や青空講演「空想科学的青  
空教室」が行なわれています。

**◆名大祭一・二年生実行委員会企画**

名大祭では、本部実行委員会企画のほかに一・二年生実行委員会が行なう企画があります。第四三回名大祭では、プレ企画として「仮装行列2002」「第一回総長杯争奪相撲大会」、本祭企画として「Sports Festival'02」「名大生白書」「DAY TIME CLUB」「名大寺」「天下一遊闘会」「合唱コンクール」など一一の企画が一・二年生実行委員会によるものでした。

このうち「仮装行列」は、第一回名大祭から行なわれているもので、名古屋市中心部にある白川公園とその周辺をパレードします。また、「名大生白書」は、一九七九年から発行されているもので、毎年さまざまなテーマを設けて名大生にアンケート調査を行ない、その結果などを冊子にまとめて名大祭の期間中に無料配布するものです。いずれも名大祭恒例の名物企画として知られています。

**◆有志企画**

名大祭では、これまで紹介した二つの企画（本部実行委員会企画、一・二年生実行委員会企画）とは異なる企画があります。「有志企画」と呼ばれている企画です。この企画は、実行委員会以外の学内・学外の団体が一定の参加手続きを経たのちに行なう企画です。原則として、「有志企画」の責任者は名古屋大学の在学生または職員であることが求められます。しかし、

## 第43回名大祭「有志企画」一覧（順不同）

占いの小部屋（愛知学院大学運命学研究所）／アカベラ（アカベラバンドM）／体感ゲームβテスト（アマチュア無線研究会）／Open Cafe（EXEXEX）／アニメ上映会&セル画展示（A.M.I）／平和の世界展（SGI女子学生部）／もったいない心（LH陽光研究所）／雷太鼓（オペレッタ）／名大よさこい祭り（快踊乱舞）／オルゴール・からくり・ロボット展（からくりフロンティア研究所）／芸音学会2002（芸音学部）／名大祭公演（劇団新生）／ポストとベット（劇団バックスの水族館）／ソロモンよ私は帰ってきた！（座部）／ゲーム（シミュレーションゲーム研究室）／アメリカの「対テロ戦争」は正義か？（社会科学研究会）／部展（名大写真部）／Club Space Shana（Shana Club）／占いの森（椋山女学園大学易学研究会）／Street Champion 2002（ストチャン実行委員会）／展示会（生物研究会）／日韓友好会（第三文明研究会）／名大祭演武会（名大合気道部）／アカベラライブ"Rising"（名古屋アカベラサークルJP-act）／第28回名大祭茶会（名大裏千家茶道部）／新作自主映画会（名大映画研究会）／第36回ファイヤーストーム（名大応援団）／名大祭演武会（名大空手道練成会）／マジック☆ショー！（名大奇術研究会）／第15回クイズ名大カップ（名大クイズ研究会）／Live House Riverside やまや（名大軽音楽部）／CCA（名大原理研究会）／名大祭演奏会（名大古楽研究会）／第40回名大祭茶会（名大茶道部）／なごすい水無月の宴（名大吹奏学部）／天竜浜名湖鉄道（名大鉄道研究会）／星くずに照らされた道（名大天体研究会）／彩展（名大美術部）／ライブ喫茶PUTINA（名大フォルクローレ同好会）／Best of SBF Sounds（名大放送文化研究会）／生ステ（名大放送文化研究会）／DJ喫茶cafe de fiesta（名大放送文化研究会）／オリジナル漫画展示（名大漫画研究会）／名大テニストーナメント（NUTS）／International Music and Dance（NUFSA）／NUSOUL（N.U.SOUL）／青空公演（人形劇サークルどんぐり）／牛肉販売（農学部動物管理学研究所）／名古屋哺乳類研究会講演会（農学部動物管理学研究所）／ボランティアフェア（Piglet）／考古学研究集会（文学部考古学研究室）／心理展（文学部心理学研究室）／星空映画会（文化サークル連盟）／化工展（分子化学工学科院生会）／2002年名大祭公演（民族舞踊団おんぶ）／模擬病院（名大医学部鶴舞祭実行委員会）／LIVE SPOT "PENT HOUSE"（名大医軽音）／サークルフェスティバル（名大観世会）／水彩画展示（名大水彩部）／タテ看（名大水彩部）／作品と世界のメガデモ展示（名大デジタル創作同好会）／豊田講堂コンサート（名大ピアノ同好会）／ライブハウス（名大フォークソング同好会）／「対テロ戦争」は正しいか？（名大理学部自治会執行委員会）／ラガドーンクエスト（ラガドーンタバーン）／名大寄席（名大落語研究会）／「ピカピカは光る」「信じれば見える」（楽知ん研究会）／青空麻雀大会（リカちゃんチョンボ!!）／DIVE!!（LIT's）／六団合同合唱祭（六団合同合唱祭）

※（ ）内は企画団体名を示す。

（『第43回名大祭パンフレット』より作成）

これらの学内団体の企画に支障をきたさない範囲で、学外団体が名大祭への参加することも認められています。

第四三回名大祭では、およそ九〇団体によるさまざまな有志企画が行なわれていました。これらの企画のなかには、ファイヤーストーム（大学応援団）、名大祭茶会（茶道部・裏千家茶道部）、クイズ名大カップ（クイズ研究会）など多数の恒例企画が含まれています。

#### ◆エコツアー企画

名古屋大学では、「ごみ減量化宣言」を行ない、一般廃棄物（ゴミ）の発生抑制（Reduce）とその分別回収の実施によってごみの再使用（Reuse）や再利用（Recycle）を促進する取り組みを行なっています。エコツアー（スタンプラリー）企画は、第四一回名大祭から実施されるようになった新しい企画の一つです。

このエコツアーでは、学内のエコポイント（廃棄物処理施設、中間処理施設、リサイクルステーションなど）を訪ね、ごみ問題への知識を深めることで、環境にやさしい生活の促進をめざしています。

## ◆「愉快な名大祭」の舞台裏

これまで本章では、二〇〇二年度開催の第四三回名大祭について簡単に紹介をしてきました。名大祭は、本部実行委員会や一・二年生実行委員会が中心となつて企画立案・実施される点で、いわば〈学生の学生による学生のための名大祭〉といつてもよいでしょう。そうしたことから考えると、名大祭は、何よりも主人公である学生自身が積極的に参加できるものであることが求められるといえます。また、名大祭が広く一般市民に公開されるという点からみると、単なる自己満足のみにならない内容の企画を提供することも同時に求められることとなります。

第四三回名大祭パンフレットにある本部実行委員会委員長のあいさつ文には、次のような一節があります（『第四三回名大祭パンフレット』）。

過去四二回の歴史の中で名大祭は様々な変遷を辿りました。当初は、名大祭における活動が名古屋大学における学術活動の発展や社会の発展に寄与するものとされていましたが、現在はそのような理念が消失し多少なりともイベント化してしまつた感が否めません。しかし私は逆に第一回から変わっていない部分もあると思つています。それは名大祭の開催による「非日常空間」の創出です。……（略）……「非日常の空間」である名大祭において皆さんが今まで知らなかった自分を発見したり、従来とは違つた考えかた・価値観を発

見することで自分の中の新たな可能性をきつと見出すことができるでしょう。

ここには、今日の名大祭が、四〇余年の歴史のなかで、当初の理念を失ってしまったということが指摘されています。では、名大祭の当初の理念とは、どのようなものであったのでしょうか。次章以降では、いわば名大祭の原像を確認しながら、その変遷のようすについて述べていきたいと思えます。

## 二、名大祭の誕生

### ◆各学部文化祭・体育祭の統一

名大祭は、一九六〇（昭和三五）年に初めて開催されました。記念すべき第一回名大祭は、名古屋大学主催・名大祭実行委員会主管という形式で、同年六月三日（金）から六日（月）にかけての四日間、鶴舞キャンパスおよび東山キャンパスをおもな会場として開かれています。



第1回名大祭風景（『学生便覧』1961年より）

ただし、開催日の前日にあたる六月二日の午後には前夜祭、また最終日の六日には体育祭が行なわれました。

第一回名大祭のプログラム冊子（以下、パンフレットという）の巻頭には、名大祭実行委員長による次のような書き出しの巻頭言が掲載されています。

名大は俗に「タコの足大学」と言われるように、全学がまとまって一つのことをするのはとてもむづかしいことです。毎年、何かあるごとに、その地理的な不便と全学的組織のない悲哀をつくづく感じます。しかし、今年こそ、それをつき破って、名古屋大学史上初のフェスティバルを六月三日の四日間、東山、鶴舞を主会場に催す

ことになりました。

この文章からは、名大祭を全学的フェスティバルとして開催することへの強い期待と喜びを感じることができると思います。当時、名古屋大学では、工学部の東山地区への移転（一九五五年）を初めとして、経済学部の東山地区移転と法学部の東山地区移転（いずれも一九五九年）が実現するとともに、一九六〇年四月には豊田講堂が完成するなど東山キャンパスの整備・拡充が着々と進められている時期でした。この点は、名大祭誕生の前提条件として第一に指摘しておく必要があると思います。すなわち、東山キャンパスへの集結といった地理的な環境が整いつつあるなかで、それ以前は各部局がそれぞれに開催していた文化祭や体育祭を全学統一的に開催できるようになったことが、名大祭誕生の一つの前提条件となっているのです。

しかし、当然のことながら、単なる地理的環境の改善という要因だけで名大の誕生を説明できるものでもありません。ここでは、名大祭誕生の時代背景として、一九五八ごろから表面化したいわゆる「六〇年安保条約改定」をめぐる問題と一九五九年の伊勢湾台風による被害の二つを取り上げておきたいと思います。



## ◆「六〇年安保条約改定」問題

「安保条約」とは、一九五二年四月に日本とアメリカ合衆国との間で交わされた日米安全保障条約（正確には「日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約」という）のことをいいます。この条約は、一言でいうと、日本国領土内の土地および施設を米国の基地として貸与する協定という性格をもつものでした。

その後、一九五五年ごろからアジア・アフリカ諸国での民族独立運動が盛んになったことをうけて、米国の対アジア政策に修正が加えられました。その内容は、アジア諸国に開発政策を導入することによって民族独立闘争や社会革命の発生を未然に防ごうとするものであり、その一環としてアジア諸国のなかでの日本の地位を高めて、日本をアジア開発政策の拠点にしようとするものでした。そして、「六〇年安保条約改定」は、それまでの基地貸与協定としての安保条約を相互防衛条約としてレベルアップさせることをねらったものでした。

この安保条約改定に対しては、一九五九年春ごろから学者・文化人、政党、労働組合、市民団体など多くの団体が改定を阻止するための運動を繰り広げました。しかし結果的に、この安保条約は一九六〇年一月に改定されて新安保条約（「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」）と「地位協定」（正確には「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第六条に基く施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する

る協定」の調印が行なわれました。さらに、同年五月には、国会に五〇〇人の警察官が導入されるという異常事態のなかで強行採決が行なわれて、新安保条約の批准案と新協定の関連法案が可決されています。なお、この強行採決に対しては、六月の四日と一五日の二度にわたってゼネストが実施され、それぞれ五六〇万人、五八二万人もの国民がストライキに参加しました。

この安保条約改定阻止の運動については、名古屋大学でも教養部学生自治会が中心となって、全学連（全日本学生自治会総連合）や愛知県学連（愛知県学生自治会連合会）等の学外組織と連携しながら講演会や学生大会、デモ行進などを行なっています。とりわけ、さきに紹介した国会の強行採決以後は、「民主主義擁護」をスローガンに当時の岸信介内閣の総辞職や国会の解散を要求する全国的な運動が展開されるなかで、名古屋大学の多くの教職員・学生がそうした運動に積極的に参加するようになっていきます。

#### ◆伊勢湾台風による被害

次に、名大祭誕生のもう一つの時代背景として、伊勢湾台風について述べておきます。一九五九年九月二二日、マリアナ群島の東で台風一五号が発生しました。この台風は、その翌日には中心気圧八九四hPa、最大瞬間風速七五mの超大型台風に発達して、二六日夕方には紀伊半



伊勢湾台風の被害を受けた建物

島の潮岬に上陸して本州を北東方向に横断しました。伊勢湾岸地方にとって最悪の進路をたどったこの台風は、同日の夜半にかけて愛知・岐阜・三重の東海三県にきわめて大きな被害（死者・行方不明者四六三七人、全・半壊家屋および流失家屋約一七万戸、被災者総数約一三〇万人）を与え、伊勢湾台風と名づけられました。

この伊勢湾台風によって、名古屋大学でも校舎の被害、教職員・学生の被災などによって半月以上も授業や試験が中断され、教養部文化祭も中止されるといった事態になっています。なお、中止された文化祭に代えて、名古屋大学主催の被災学生救援のための音楽会が一月二六日に名古屋市公会堂で開催されました。

また、被災した教職員や学生に対する学内関係者による救援活動も活発に行なわれました。

それは、被災直後の救出・救援物資の補給や、その後の経済的・心理的なケアにいたるまで多面的かつ長期的なものであったといえます。なかでも被災の直後から救援活動を開始していた教養部学生自治会では、教養部学生災害対策本部を設けて延べ三〇〇〇人の学生参加を得て、運搬・連絡から遺体の收容といった過酷なものを含めた救援活動を展開しました。こうした献身的な学生の活動に対しては、多くの被災者から感謝の手紙が名古屋大学に寄せられました。また、愛知県議会も名古屋大学の教職員・学生に対する感謝決議を行なっています。

#### ◆名大祭がめざしたもの

冒頭で紹介した第一回名大祭パンフレットの巻頭言には、次のような一節もあります。

私達学生は、「平和と民主主義、よりよき学生生活」を求めて、いわゆる学生運動をしています。名大祭も当然その一翼をになうものです。マス・コミのかたよった報道によって、一般に学生運動の政治面のみがクローズアップされがちですが、——そしてまた、ともすれば、私達自身が、これにひきづられがちですが、——平和と民主主義を守る斗いは、こうした場でこそ、学生の本領が発揮出来るものと自負しています、すなわち反動的な学問、たいはい的な文化、体育を打ち破り、科学的な学問を確立し、創造的な文化、体育を

生み出してゆくことです。この意味でも、名大祭が、全学的にもてたことを心から喜びかつ誇りに思っています。

さきの引用部分とあわせ読むことによつて、東山キャンパスへの集結という地理的条件に加えて、当時の社会的背景を契機に高揚した「学生運動」のエネルギーを全学的に結集するという面で、名大祭の開催そのものが学生にとっては一つの象徴的な行事であつたといえるのではないでしようか。

### 三、時代を映す名大祭①—一九六〇年代

#### ◆第一回〜第一〇回のテーマ

名大祭では、その年ごとにテーマが設定されています。たとえば、第一回名大祭のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて—日本人民の歴史づくりのために—」で

した。また、第二回のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて―変革の時代における学生の立場と役割―」というものでした。

これら第一回・第二回では、メインテーマは同じですが、サブテーマが異なっています。こうしたテーマの設定は、「昨年からとびはなれた今年五月というのではなく、この一年間にひきつがれてきた学問、文化面の創造的活動の一拠点として、第一回に連結した第二回」という考えによるものでした（『第二回名大祭パンフレット』）。

名大祭一覧（1）として、第一回から第一〇回までの名大祭のテーマなどを示しておきます。この時期のテーマでは、「人民」「祖国」「民族」「連帯」「真理の砦」など今日ではあまり聞き慣れないことばが繰り返し使われています。これら一九六〇年代のテーマをみて、当時の名大祭に対して読者の皆さんはどのような印象をもつのでしょうか。以下、本節では、一九六〇年代の名大祭テーマの背景や特徴について触れておきたいと思います。

#### ◆時代背景―一九六〇年代

前章において、名大祭誕生の時代背景として、二つのことを紹介しました。一つは、六〇年安保条約の改定をめぐる全国的な社会状況です。もう一つは、伊勢湾台風による被害とその救済活動という東海地方固有の社会状況です。

## 名大祭一覧（1）

回	開催年（日程）	テ ー マ	
		メ イ ン	サ ブ
1	1960年 （6/2—6）	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	日本人民の歴史づくりのために
2	1961年 （5/21, 5/26—28）	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	変革の時代における学生の立場と役割
3	1962年 （5/13, 5/27, 5/30—6/3）	戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう	新しい名古屋大学づくりのために
4	1963年 （5/30—6/2）	祖国に平和を 大学に民主主義を なくささとせちがらさをつけて 人民の輪の中に私たちの未来を築こう	私たちの新しい生き方を見いだすために
5	1964年 （5/26—31）	胎動から躍動へ 祖国の痛みがさらにはげしくうづく今 ぼくらの連帯は巨歩を進める、さらにもう一歩前へ	民主的学問、民族性豊かな文化を創造する中で
6	1965年 （5/9, 5/16, 5/25—30）	大学に新しいいぶきを ゆれ動く世界の中で 岐路に立つ我ら 逆流に抗して人民の輪を広げよう	生活に根ざした文化、平和のための学問を追求する中で
7	1966年 （5/22, 5/29, 6/7—12）	築こう平和と真理のとりでを 嵐の中のアジア・祖国日本 深まりゆく大学の危機について 僕ら連帯の輪をさらに広げよう	大学が真に民族の課題に応えるために
8	1967年 （5/14, 5/21, 6/6—11）	はばたけ創造のつばさ 反動の嵐の中 たちあがる人民と呼びかわし 学問・文化に力強い生命を	祖国の平和と豊かな学園生活をめざして
9	1968年 （6/4—9）	この祖国に平和と民主主義を 我ら真理のとりでを築くもの たぎる力をよりあわせ 歴史をになう人民の隊列へ	学問・思想の自由を守り、「明治百年祭」を批判するなかで
10	1969年 （6/4—8）	磨け 祖国切り拓く 科学の メスを 我ら真理の砦きづくもの 従属の鎖たちぎる 統一の力今こそかたく	自主的活動を追求し、大学民主化を推進するなかで

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

では、その後の一九六〇年代の社会情勢はどのようなものだったのでしょうか。ちょうど第一一回名大祭パンフレットには、過去一〇回の名大祭を振り返った「名大祭の歩み」というコラムが掲載されています。少し長くなりますが、次に引用しておきます（カッコ内は引用者補注）。

六〇年安保闘争以後、学生運動の中に分裂と混乱が持ち込まれ、(第二回)名大祭も困難な状況に直面してゆきます。……(略)……学生運動分裂のあたりで、(第三回)名大祭は一時建設的、実践的な方向を見失いかけてましたが、新しい学生運動の芽は下からの盛り上がりとして、積極的に示されました。……(略)……(第四回名大祭では)全学フェスティバル、民族の心を呼ぶもの、など……(略)……創意性あふれる名大祭企画、活動がくりひろげられました。学生運動の統一と団結がすすめられ、「自治会はみんなのものみんなの利益を守るもの」という方向がはつきりとしてきました。第五回名大祭は……(略)……第四回名大祭の新しい芽を伸し、「若者のつどい」「日朝友好のつどい」など学外他階層との連帯を一層強化する取り組みがふえました。……(略)……第六回名大祭ではアメリカの北爆が開始され、日「韓」条約が結ばれようとし、第七回では、全学ぐるみで日「韓」条約反対を叫びました。……(略)……第八回では……(略)……名大づくりが焦



点になり、第九回名大祭は大学問題が国民的問題となる中で、市民との連帯、日常の学間研究活動の現状調査が強調されました。……(略)……(第一〇回名大祭では)大学ぐるみで「大学法」(「大学の運営に関する臨時措置法案」)に反対してゆく中で、大学の民主化、学間研究活動の発展めざしてとりくまれました。

右の引用文で述べられている「全学フェスティバル」「民族の心を呼ぶもの」「若者のつどい」などは、この時期の名大祭の特徴を示す企画であるといえます。これらを中心に、一九六〇年代の名大祭のおもな企画を簡単に説明しておきたいと思います。

#### ◆中心企画としてのテーマ関連講演会

この時期の名大祭において、テーマ関連の講演会をはじめとするテーマ関連の企画は、全学企画としてきわめて重要な位置づけを与えられていました。ここでは、第三回名大祭を例にして紹介しておきます。

第三回名大祭は、本祭の期間として四日間が設けられていました。そして、この日程のなかでテーマ関連企画は、最終日を除く三日間の午前中に必ず実施されています。すなわち、初日の午前一〇時から午後一時まではテーマ講演会Ⅰとして「現代における学問の課題と大学の役

割」(上原専祿二橋大学名誉教授)と「戦後における大学の形成と学生の諸問題」(井上清京都大学教授)の二講演、二日目の午前一〇時から正午まではテーマ講演会Ⅱとして「新しい名古屋大学の展望と我々の果すべき役割」(新村猛名古屋大学文学部長)の一講演、三日目の午前九時半から午後二時半までは全学シンポジウム「戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう―新しい名古屋大学づくりのために―」がそれぞれ行なわれています。

しかも、これらの全学企画が行なわれている時間帯には他の企画が行なわれておらず、文字どおり、すべての学生が参加できる企画としての形態をとっていることがわかります。

#### ◆全学シンポジウム

これは、第一回名大祭から行なわれている全学企画で、原則として、テーマ講演会と密接に関連づけられて企画されています。たとえば、第四回のシンポジウムでは、事前に行なわれた学部別シンポジウム内容についての各学部報告者によるレポート、それに対する助言者の発言、さらに名大祭テーマ講演内容を軸としながら、学生が当面する諸問題や大学の役割などについて具体的な討論が行なわれたようです。

そうした点からも、当時、この企画は「名大祭の最初から全国にも珍しい積極的な、大衆的



第7回名大祭 若者の集い（第7回パンフレットより）

な思想運動として作りあげられ、『統一テーマを深める』ということを直接的に行なう、名大祭の軸、名大祭の魂ともいべきもの」と位置づけられていました（『第四回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学シンポジウムは、第二回名大祭以降は実施されなくなっています。

#### ◆全学フェスティバル

これは、「名大祭のテーマを中心にすえた、みんなの『やる名大祭』の企画」として、第四回名大祭から新たに設けられた全学的な企画です。『やる名大祭』とはいわゆる参加型の名大祭のことを意味しており、この全学フェスティバルでは、他大学の学生や市民の参加を得ながら、演劇・合唱・演奏・踊り・スライドなどあ

らゆる手法を駆使して「バカデカクテ愉快な」総合芸術の創造が追求されました。

この全学フェスティバルは、名大祭の最終日に豊田講堂で開催されるのが通例でした。たとえば、第七回名大祭の際には、二時間にもおよぶシナリオを全員で創作し、八〇〇名以上の出演者による合同演奏・合唱を行なってフィナーレを飾ったとされています（『第八回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学フェスティバルは、第一九回名大祭（一九七八年）まで毎年開催されていました。

#### ◆民族の心と呼ぶもの

全学フェスティバルと同じく、第四回名大祭から始められた企画です。この「民族の心と呼ぶもの」は、民謡・落語・漫才などの日本の民俗芸能・大衆芸能に触れる機会を提供するものでした。この企画の背景には、「おしきせのアメリカ文化、植民地的文化でなく、日本には日本独自に発展した素晴らしい文化」があり、それら文化は『人民のいぶき』が感じられ私たちが真に心の底から感動させ、誇りを持たせる」ものであるという考えがあります（『第五回名大祭パンフレット』）。

なお、この「民族の心と呼ぶもの」は、第八回名大祭までは独立した企画として開催されて

いましたが、第九回名大祭の際に全学フェスティバルに吸収されています。

◆若者の集い

第五回名大祭から登場した「若者の集い」は、働く人（勤労青年）と学問する人（大学生）との交流の場を提供する企画として始められ、第一〇回名大祭まで開催されていました。この企画の初回のパンフレットには、次のような開催趣旨が掲載されています（『第五回名大祭パンフレット』）。

人間の生活で最も神聖であるべき労働に関し、現状は、労働者を金に換算出来る商品として人命を軽視し、自由化に対する措置と称して、合理化の名目で多数の労働者の首をわずかの金で首を切り、大会社同士は合併し、大財閥の出現、その反面中小企業の倒産、物価の上昇など、若者の疑問と不満は大きい。それに一方、学生には……（略）……学生の正当な権利と自治が制限され侵されている現状を真剣に話し合う必要があると思います。働く人と学問する人との間にある人間らしく生きる権利に関し今迄、相方があまりに両方が無関心だった事を改め、……（略）………本当の労働の意義、学問の意義を追求する中で、皆な若者は友達であり仲間である事を再認識し、すばらしい若者の若さで僕達の世界を作ろうではありませんか。

## ◆一九六〇年代の名大祭

この時期の名大祭テーマは、学生運動との深い結びつきを基本に、国内外の情勢も視野に入れたさまざまな政治・社会問題に敏感に反応したものであったということができます。当時の学生は、名大祭を学生のさまざまな要求実現の場であるとともに、学外の一般市民との交流・連帯の場であると位置づけていたのです。その意味において、名大祭は一定の緊張感をともなう場であったともいえるでしょう。

時期的には少しずれがありますが、一九七一年に開催された第一二回名大祭パンフレットにおいて、芦田淳学長は、「名大祭は読んで字が示すように、『おまつり』であります。人間は緊張の連続で生きられるものではありません。楽しみも織りこんだものであってほしいと思います。」とのメッセージを寄せています。このメッセージの背景には、一九六〇年代の名大祭が緊張感をともなう場としての性格を強くもっていたことをうかがわせます。



名大祭パンフレット表紙 (第11・12回)

#### 四、時代を映す名大祭②—一九七〇年代

##### ◆第一一回～第二〇回のテーマ

名大祭一覽(2)には、一九七〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。一九六〇年代のテーマと比較すると、メインテーマが短くなっている一方で、サブテーマが長くなっています。また、この期間のほとんどのメインテーマでは、「青春」や「歌」がキーワードになっているといえます。

この時期は、いわゆる「大学紛争」が鎮静化した時期にあたります。名古屋大学でも、鶴舞キャンパスでの「医学部紛争」を一つの契機として、東山キャンパスでの「大学紛争」が一九六〇年代末に起こりましたが、この時期にはすでに沈静化していま

## 名大祭一覧（2）

回	開催年（日程）	テ　　マ	
		メ　　イ　　ン	サ　　ブ
11	1970年 （5/30， 6/10 －14）	変革にいとむ青春	新しい歴史厳粛に迎える我ら 真理への情熱を燃やし 統一と 団結の鉄槌を鍛えん
12	1971年 （6/9－13）	怒れ知性燃えあがる日本列島	真理究めるわれら 逆巻く濁流 をついて 平和と民主主義の統 一をめざさん
13	1972年 （5/28， 6/7 －11）	高らかに歌え！ 青春の叙事 詩	迫りくる嵐そして濤 我ら勇敢 な「海つばめ」たらん
14	1973年 （6/6－10）	日々新たなる青春の復権を	生ける科学の草の根よ 雄々し く育て 行く手を阻む 巨岩 を砕け
15	1974年 （6/5－9）	大学ににんげんのうたを	それは模索し発展する科学のう た 語らい呼びかわす連帯のう た 培い励まし合い国民のため の日本をつくる変革のうた
16	1975年 （6/4－8）	ひきしばれ青春の弓	射よ嵐の目に 熱き鋼の矢を
17	1976年 （6/9－13）	響け われらのロンド	吹きぬける科学の烈風 黒雲を 裂け わきあがれ大地に 建設 のエネルギー
18	1977年 （6/8－12）	湧きあがれ 学問と変革のシ ンフォニー	ひたむきな歴史の探索と 確信 への追求から 今生み出される 明日への飛翔 我が学舎と 当 惑する祖国に
19	1978年 （6/7－11）	我らの手で真の科学を	我ら数多なる知の泉、歴史の大 河にそそぎ 深き流れとなりて 逆流をつき破らん
20	1979年 （6/5－10）	知を力に 逆風に対峙し奏で よう 変革の前奏曲	

（各年『名大祭パンフレット』より作成）



した。一九七〇年以降、名大祭のテーマ表現が明らかにそれ以前と異なっている背景には、そうした事情があったといえます。

#### ◆一九七〇年代の名大祭テーマアピール

この時期の名大祭パンフレットに掲載されたテーマアピールに目を向けると、当時の社会情勢やそれに対する学生の認識がとてよく理解できます。以下に、そのいくつかを紹介していきます。

人間らしく生きたい——僕たちはいつもそう思う。人間らしく生きる——こんなあたりまえにみえることが決して容易ではない、僕たちの時代。小学校の門を、小さな胸をふくらませてくぐった、その時に先ず知らされた「できる子」「できない子」という言葉。中学校時代、受験時代の差別と選別の教育のなかで、見えるものに目をつぶり、聞こえるものに耳をふさいで「死なないように生きる」ことを強いられてきた僕たち。……(略)……「青春」と「信頼」、この二つの言葉を持つ、本来の輝きと「美しさ」が失われて久しいけれど、僕たちは知ってはいないか。「こんな『青春』でない、別の『青春』がもつとほかのところにあるはずだ」「こんなばらばらな僕たちだけれど、そんな僕たちだけ

『信頼』でできる友達がほしい」そんな願いと、言葉の持つ「美しさ」、言葉への信頼をとりもどす願いをこめて、……(略)……第一四回名大祭ははじまる。

(『第一四回名大祭パンフレット』)

僕たちの学問は、国民生活との関わりを無視しては考えられない。「何のために学ぶのか」という問いかけ。この学生としての僕たちにとつて最も真摯しんしな問いに、「国民のための大学」という言葉をもつて、何らかの方向性が与えられはしないか。僕たちはそれを今年の名大祭でめざしたいと思う。学生に共通の基盤の一つは「真理を究める」ということだ。……(略)……しかし自分のまわりをながめてみると、その最も基本的な基盤さえ、今非常に脆弱ぜいじやくなものとなつてしまつていて感ずる。……(略)……どう見ても将来への展望がわいてこない社会の現状。不公平と不正が横行し、強い者はあくまで強く、弱い者が徹底的にいじめぬかれる今の世の中、真理の存在すらが疑わしくなる日常の生活で、ともすればその日常に慣らされてしまいなから、それでも満足できず、僕たちは今確かなものを掴つかみたいと願つて……(略)……

(『第一九回名大祭パンフレット』)



名大祭フォークダンス風景（『第13回名大祭パンフレット』より）

これらのテーマアピールには、一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期のなかで、受験競争社会をくぐり抜けてきた学生の真情が示されていると思われます。

## 五、時代を映す名大祭③—一九八〇年代

### ◆テーマの簡潔化

名大祭一覧（3）には、一九八〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。第二回名大祭以降は、サブテーマが設けられなくなっている点に一つの特徴があります。また、もう一つの特徴として、すでに一九七〇年代からみられたメインテーマが短

## 名大祭一覧（3）

回	開催年（日程）	テ ー マ	
		メ イ ン	サ ブ
21	1980年 （6/10-15）	輝け 我ら知の銀河	押し寄せる暗闇 引き裂く若き エネルギー 込み上げる胸の疼 き 熱き炎となりて未来を燃や し 学術文化と連帯の力たから かに 創り上げろ希望と変革の 大地を
22	1981年 （6/9-14）	われらとわれらの子孫のため に	
23	1982年 （6/8-13）	輝く地球と未来をわれらで	
24	1983年 （6/7-12）	改造	
25	1984年 （6/5-10）	反攻	
26	1985年 （6/4-9）	刻みこめ 青春の鼓動を 新 たなる胎動に	
27	1986年 （6/10-15）	熱帯雨林、諸子百家。	
28	1987年 （6/9-14）	脱	
29	1988年 （6/7-12）	我がまま開発	
30	1989年 （6/7-11）	すばらしい	

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

くなる傾向が、この時期になつてさらに強まったという点にあります。

◆「学長あいさつ」からみた名大祭

テーマが簡潔化されるということは、その内容が抽象化されていることを意味します。『広辞苑』（第五版）によると、「抽象的」とは「現実から離れて具体性を欠いているさま」であるとされています。では、この時期におけるテーマの簡素化は、現実の名大祭の具体性とどのような関係にあったのでしょうか。

諸君、今年の名大祭のテーマをえらんで、『脱』という。それがたんなる逃避に非ず、消極的な過去の便宜的清算に非ず、むしろ飛躍して視野を広め、名実ともに充実し、自己を呪縛から解放し、以て大いにはばたく契機たらしめようとするためには、ここにいかなる祭典を持つべきか。テーマがいたずらに名大祭の実態から遊離し、たんなる飾りとして終わらないためにも、私はあえて名大祭の実態を諸君に問いたい。……(略)……名大祭は、名古屋大学の祭りであり、名古屋大学学生の祭典である。卑小と幼稚な自己陶醉をさらけ出して、それを祭りと錯覚して恥じないようなおろかさは、万々諸君のなかには存在しないと信じるが、呉々も名大祭を大切にしてくれたまえ。今年の名大祭に「脱」の精神がい

かにつらぬかれ、いかに表現されるか、私は期待をもって見守る。名大祭に幸あれ。

これは、第二八回名大祭パンフレットに掲載された飯島宗一学長のあいさつ「名大祭に寄せらる」にある一節です。ここには、名大祭のあり方に対して警鐘を鳴らしながらも、期待を寄せる学長の真情が示されているように思います。

#### ◆テーマ企画の減少

一九七〇年代以前の名大祭では、毎年決められるテーマがその年の名大祭そのものを規定するほどの性格をもっていました。したがって、名大祭ではそのテーマに直接に関連する中心的な企画が行なわれることが当然であるという認識が当時の学生にはあったのだと思います。

実際、当初の名大祭ではその年のテーマに関連した講演会・討論会やシンポジウムが大々的に開催されていました。むしろ、そうした学術的あるいは文化的な企画が中心に据えられたうえで、各学部企画・サークル企画やアトラクションなどの周辺の企画が展開されていたといえます。

しかしながら、時代の推移とともに、状況は少しずつ変化しています。たとえば、名大祭テーマに真正面から取り組む講演会やシンポジウムなどの全学企画は、第二一回名大祭以降は



第27回名大祭風景（『'87名古屋大学卒業アルバム』より）

次第に行なわれなくなっています。ただし、誤解を避けるために述べておきますが、一九八〇年代以降にすべての全学企画がなくなってしまうわけではありません。もちろん、第二二回以降にも全学的な「テーマ」企画は行なわれています。しかし、それらのほとんどは、名大祭テーマとは直接的な関連を必ずしも持たない「テーマ」を扱った講演会やシンポジウムとなっています。

#### ◆一九八〇年代名大祭の特徴

第二六回名大祭パンフレットの目次には、「オムニバス企画」という項目が登場します。この項目に掲載されている企画をみると、いくつかの新しい企画もある一方で、一九七〇年代や一九六〇年代から行なわれてきた伝統的な企

画が多く含まれていることに気づきます。ここに、この時期の名大祭の特徴の一つを見出すことができると考えられます。

「オムニバス」という語は、「映画などで、いくつかの独立した短編を並べて一つの作品にしたもの」を意味します。名大祭では、第一回当時から限られた日程のなかで数多くの企画が行なわれてきました。その点からみると、名大祭そのものが一つのオムニバスであるといえるかもしれません。しかし、学生運動の高まりを背景に展開された一九六〇年代における名大祭では、エネルギーの結集や連帯がキーワードとされるなかで、さまざまな企画が一つのテーマを共有しながら全体としての名大祭が形づくられていたという印象を強く受けます。こうした傾向は、一九七〇年代における名大祭においても共通していると思います。

これに対して、「多様化の時代」といわれた一九八〇年代に入ると、次第に状況は変わってきたようです。一九八三（昭和五八）年の第二四回名大祭パンフレットには、本部実行委員長による次のようなあいさつ文が掲載されています。

青年向けの情報誌や娯楽雑誌などに見られる、祭としての要素のみが強調されてきた大  
学祭像によつて、ともすれば見失われがちな大学祭の役割を、私たちは、今、もう一度思  
い起こしてみなければなりません。



さきに紹介した飯島学長による第二八回名大祭あいさつとこの指摘をあわせ読むと、この時期の名大祭が、抽象化されたテーマのもとで、よい意味で統制されることもなく、単に「オムニバス」的な傾向を強めていたことが浮き彫りにされるのではないだろうか。

## 六、時代を映す名大祭④—一九九〇年代

### ◆第三一回〜第四三回のテーマ

名大祭一覧（4）には、一九九〇年代以降における名大祭のテーマなどを示しました。

この時期は、一九九七（平成九）年の第三八回名大祭を除くと、一九八〇年代のそれとほぼ同様にサブテーマを設けることなく比較的短いメインテーマが続いています。

## 名大祭一覧（４）

回	開催年（日程）	テ ー マ	
		メ イ ン	サ ブ
31	1990年 （6/6-10）	文明の育ての親と生みの親である。	
32	1991年 （6/5-9）	未来への足跡	
33	1992年 （6/10-14）	腐った鯛、原石のダイヤ	
34	1993年 （6/9-13）	卵からかえる瞬間	
35	1994年 （6/8-12）	種まいて、水かけて、	
36	1995年 （6/7-11）	夢見る頃を過ぎて・・・今こそ動き出すとき	
37	1996年 （6/5-9）	カニ	
38	1997年 （6/11-15）	くざった学生。くざった教授。	真の大学改革を目指して
39	1998年 （6/10-14）	崖つぶち	
40	1999年 （6/9-13）	0からの創造	
41	2000年 （6/7-11）	好きです、名大	
42	2001年 （6/6-10）	白地図	
43	2002年 （6/5-9）	飛翔	

（各年『名大祭パンフレット』より作成）



第31回名大祭 仮装行列（『'94名古屋大学卒業記念アルバム』より）

◆ 「お祭り企画」の増加

この時期の名大祭の動向を象徴的に示していると思われることのひとつとして、「お祭り企画」という項目がパンフレットに登場するとともに、その企画数が増加傾向にあることを指摘できます。この項目は、第三一回名大祭パンフレットで新たに設けられて以降、第三六回パンフレットまで連続して設けられています。この「お祭り企画」という用語から、前章で紹介した飯島学長のあいさつ文を連想した読者も少なくないと思います。当然のことながら、右に述べた各パンフレットでは、「お祭り企画」のほかに、「学術企画」「学部祭」「有志企画」などの項目があります。この「お祭り企画」という表記には、一体どのような意味が込められているのでしょうか。

この点に関しては、名大祭関連の学内資料をみると、一九八〇年代後半ごろから名大祭に参加する学生数（とりわけ学部学生）が減少する傾向にあり、まさに一九九〇年代前半ごろは本部実行委員会側が〈学生層を引き戻す、魅力ある名大祭づくり〉を懸命に模索していたことがわかります。「お祭り企画」による魅力の強化ということの是非はともかく、名大生の多くが参加しない名大祭に対する一種の危機意識が読み取れるのではないのでしょうか。

### ◆第三八回名大祭テーマ

ここで、この時期の名大祭では異色な第三八回（一九九七年）のテーマについて、簡単に説明をしておきます。

「くさった学生。くさった教授。」というメインテーマは、その大胆さが議論を巻き起こし、新聞にも取り上げられました。このメインテーマには、当初「二一世紀への挑戦状」というサブテーマがつけられていましたが、最終的には「真の大学改革を目指して」という表現に改められています。

なお、この第三八回のテーマは、翌年のテーマ「崖つぶち」にも影響を与えていることが次の文章からもわかります（『第三九回名大祭パンフレット』テーマアピール）。



前回、……(略)……大学における学生教授双方の無気力さに対して一つの警告がなされました。しかし、……(略)……改善に向けての行動を起こした学生は教授はいつたいいかりいたでしょう。問題意識を失った大学はもはや「崖っぷち」状態にあるといえます。しかし、このあと一步の「崖っぷち」状態で踏み留まり、この状態を脱しなければなりません。そのために何が重要なのか。今こそ学生教授一人一人自覚し、さらなる飛躍を  
目指そう。

## おわりに―名大祭の未来―

名大祭は、約四〇年前から現在にいたるまで、同じ名古屋大学において同じ名称で繰り返して行なわれてきた行事ではありますが、一つとして同一内容のものはありません。それは、少なくとも名大祭という場が、それぞれの時代の学生にとって自己表現の場として受けとめられていることを示しているといえます。

本書では、便宜的に一九六〇年代、七〇年代といった形での時期区分を行ないましたが、結果的にはそれぞれの時代ごとにおける学生たちの自己表現の方法・内容を一定程度描くことができたのではないかと考えています。

第一章でも紹介しましたが、二〇〇二（平成一四）年の第四三回名大祭パンフレットには、「名大祭は非日常的な空間を創出する」という趣旨の本部実行委員長のあいさつがありました。実は、これと同じような趣旨の指摘は、第三一回（一九九〇年）名大祭パンフレットにも掲載されています。すなわち、名大祭が「単なるばか騒ぎの場というだけではない」としたうえで、「祭は日常の細かい規則などというものを忘れ、楽しく非現実的な空間を創りだすことに意義がある」とされているのです（『第三一回名大祭パンフレット』）。こうした考え方は、一九六〇～七〇年代における学生の名大祭像とは明らかに異なっているといえます。しかし、この相違については、その良し悪しを論じるべき性質のものではないと考えます。

二〇〇一年度で開催された第四二回名大祭の本部実行委員会委員長は、パンフレットのなかで次のように述べています（『第四二回名大祭パンフレット』）。

……（略）……名大祭も、時代の流れの中で良くも悪くも変貌を遂げてきました。近年の名大祭は内容も無思想化し、ただ娯楽性を求めただけのお祭り騒ぎと受け取られるかも

しれません。しかし、どちらが名大祭としてあるべき姿なのかは誰にもわかりません。どちらにもそれぞれ良いところがあるので。かつての名大祭には確固とした目標があり、一致団結してそれに向かうという強さがありました。近年の名大祭には万人が気軽に集い、そのエネルギーを結集し、参加者皆が交流できる場があります。

この指摘のとおり、「名大祭とは、こういうものでなければならぬ」といったような固定された名大祭像があるわけではありませんし、また、そういったものがある必要はないと思います。ただし、「確固とした目標」があることと「参加者皆が交流できる」ことは、必ずしも二者択一の問題ではないと考えられます。さらに、名大祭という場は、名古屋大学を地域社会に公開し、地域社会と大学の交流を行なうには最適な機会となりうることは否定できないと思います。その点から考えると、名大祭のあり方にはある程度の規範が必要であるということになるのではないのでしょうか。

本書は、その規範を明示することを目的としているわけではありません。そうした規範は、名大祭本部実行委員会を中心とした本学の構成員が知恵を出しあって創り出していくものだと思います。その際、本書で取り上げた名大祭の歴史のなかから何らかのヒントを得ることができるとは思いません。



## 引用文献・主要参考文献

- 名大祭本部実行委員会編『名大祭（プログラム）パンフレット』（各回、一九六〇～二〇〇二年）
- 「名大祭実施結果報告書」（第二九回以降、一九八八～二〇〇二年）
- 「中日新聞」一九九九年四月二十九日付
- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史（通史二）』（名古屋大学、一九九五年）
- 『名古屋大学学生便覧』（各年度版、一九五〇～二〇〇二年）
- 日高六郎編『一九六〇年五月一九日』（岩波新書、一九六〇年）
- 名古屋市総務局調査課編『伊勢湾台風災害誌』（名古屋市、一九六一年）

著者略歴

山口 拓史（やまぐち たくじ）

一九六二年 兵庫県生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学

研究科博士課程（後期課程）単位取得

退学

現在 名古屋大学史資料室助手

専攻 高等教育史

名大史ブックレット7

名大祭——四〇年のあゆみ——

二〇〇三年三月三十一日 第一刷発行

著者 山口 拓史

編集発行 名古屋大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇

電話 〇五二（八七二）九一九〇





表紙写真：第43回名大祭「模擬店ストリート」風景  
(名大祭本部実行委員会提供)